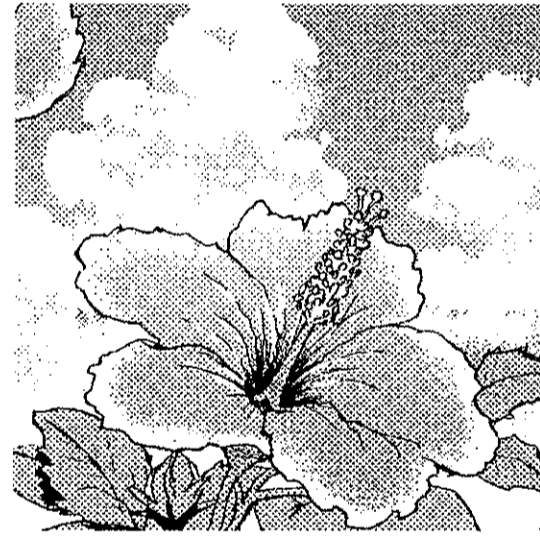


まいど！倫理号で、又々山陰地方記録的な大雨、何んぞ
こんな大雨になるのか、梅雨のような情緒のある雨はどう
なったのか、被災された皆様、心よりお見舞い申し上げます
見掛けがも「善い事」を「善い事」でゆくと
2013. 8. 24~8. 30
本物にない人です。大聖大社の大神は 835号

国護りの見返りに 目に見えぬものを授けられたいかそれは
“お陰様”とか、 幸せ運ぶアホ-鳥

JR三大車窓の姨捨駅周辺にそびえ立つ
姨捨山は、長野県千曲市と筑北村にまたがる
山で、民話の里としても有名な地域です。
山頂には、冠着神社を祀る鳥居とトタン屋
根の祠があり、祭神は月夜見尊で、山頂で蛭
が舞う七月に氏子が登って御籠もりをする
祭りが開催され、高浜虚子の「更級や姨捨山
の月ぞこれ」の句碑もあります。
姨捨山には伝説があります。平安時代の歌
物語として残っている『大和物語』が起源と
されます。鹿児島県の甕島（こしきじま）に
も、姨捨に似た民話が伝承されています。
昔、貧しい村や農家では、食い扶持を減らす
ために、お年寄りを山へ捨てに行く習慣があり
ました。その村に、母親と息子の二人で住んで
いる農家がありました。ある日、息子は村の掟
により、年老いた母親を山へ捨てるため、リヤ
カーに乗せて、近くの山の頂上目指して登って
いきました。登山の途中、後ろで枝が折れるよ
うな音が何度かしましたが、気にも留めずに
頂上までたどり着くと、辺りは真っ暗になって
いたのです。息子は、頂上に年老いた母親を置
き去りにし、真っ暗な道を下山しはじめました。
すると、道の途中途中の枝が折れているのに気
づきました。実は、母親が、自分を捨てる息子
が帰り道に迷わないよう、道の要所要所で枝
を折って目印をつけてくれていたのです。
母親の深い愛に目覚めた息子は頂上まで
戻り、母親を連れて帰ってひっそりと親子二
人で暮らしました。その時の母親が作った歌

親や先祖への感謝を深め 毎日を明るく生きよう



絵・今谷 鉄柱

が残っています。
「道すがら枝折々々と折る柴はわが身見棄
てて帰る子のため」
昔話や民話には数々の親孝行に関する逸
話が残されています。江戸時代、八代将軍・
徳川吉宗の次のような逸話があります。
吉宗は、長野県のとある地域に鷹狩りに出
掛けました。吉宗を一度でも見たいと、村中の
人が道の脇で吉宗を歓迎しました。その中に、
老婆を背負った青年が立っておりました。話を
聞くと、老婆は自分の母親で、足腰が弱くなっ
て歩けなくなり、冥土の土産に吉宗を拝みた
いので、息子に背負って連れてきてもらっていた
のです。それを聞いた吉宗はいたく感激をして、
その場で息子に褒美を取らせました。翌年、同
じ村へ鷹狩りに出掛けると、老人を背負って立
っている若者が沢山いたのです。皆、吉宗から
褒美をもらいたいがために、形だけの親孝行を
していたのです。しかし吉宗は「見返りを求
めていても善いことをしているのだからいいでは
ないか。皆に褒美を取らせよう」と、一人ひと
りに褒美を渡しました。数年後、その村の若者
は、見返りを求めずに親孝行ができる日本一
の孝行村になったのです。
自分の命の源は親であり先祖です。感謝の
気持ちが高まる時、八方塞の危機の中でも
上下の抜け道から光が射すことが往々にし
てあります。常に「おかげさまで」という言
葉を口ずさみながら、毎日を明るく過ごして
いきたいものです。